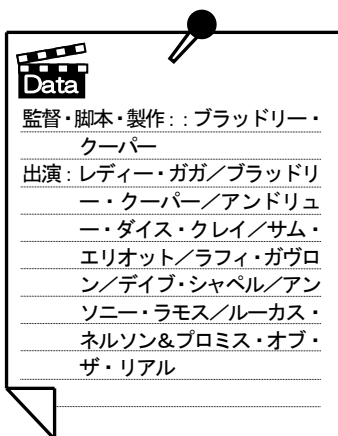




■■ショートコメント■■

◆日本版の『スター誕生』は1970年代のテレビ番組。そこから森昌子や桜田淳子、山口百恵等のスターが次々と生まれた。他方、ハリウッド版『スター誕生』はジャネット・ゲイナーとフレデリック・マーチ共演の『スタア誕生』(1937年)、ジュディ・ガーランドとジェームズ・メイソン共演の『スタア誕生』(1954年)、バーブラ・ストライサンドとクリス・クリストファーソン共演の『スター誕生』(1976年)という過去の名作のこと。しかして、今般、レディー・ガガとブラッドリー・クーパーの共演で新たな『スター誕生』がスクリーン上に登場!

◆私は女性歌手レディー・ガガの名前は知っていても、その歌う姿や曲をじっくり見たことも聞いたこともなかったが、本作ではレディー・ガガ扮するアリーが歌う1曲目の「ラ・ヴィ・アン・ローズ」を聞くだけで、その歌声のすばらしさにビックリ! 現役で人気絶頂のプロ歌手ジャクソン(ブラッドリー・クーパー)がその声に惚れ込むのだから、そのレベルの高さがわかろうというものだ。

本作ではその後のジャクソンのアリーに対するアプローチが見モノだが、そこには公の面と私の面の両方が……。最初は恐る恐るジャクソンについて行っていたアリーだが、舞台上が上がったりレコーディングしたり作曲したりしているうちにその実力はみるみるうちに……。

◆本作ではジャクソンが意外にあっさり自分の“出自の秘密(?)”やマネージャーをしている兄のボビー(サム・エリオット)との関係をアリーに告白するが、それを聞いているとジャクソンには酒乱の気がありそうで少し心配……。しかして、アリーがジャクソン

と過ごす時間が多くなるにしたがって、アルコール依存症とも言えるべきジャクソンの酒癖（の悪さ）と、少しずつ悪化している左耳の難聴が心配に……。しかし、それを注意されることを嫌うジャクソンは、“人生は太く短く”とばかりに自由（勝手気まま？）がミュージシャンとしての生き様と貫いていたが、ある日ノドの異変が……。それに対して、今や伸びざかりのアリーはグラミー賞にノミネートされるまでに。そんな中で結婚生活に入った二人は……？

◆1986年生まれの人気絶頂の女性歌手レディー・ガガの主演と聞いて、私は「その演技力は？」と心配したが、本作を観ていると、何の何の。その演技はしっかりしたものだ。他方、『世界にひとつのプレイブック』（12年）（『シネマ30』30頁）と『アメリカン・スナイパー』（14年）（『シネマ35』24頁）で2度アカデミー主演男優賞を受賞している俳優ブラッドリー・クーパーの演技力は折り紙付きだが、歌手ジャクソン役をどうやって演じるの？そう思っていると、これもさすがといえる歌いっぷり。更に、本作では監督までしているから大したものだ。

もっとも、一曲全部を歌いきるとボロが出るかもしれないと心配したためか、ブラッドリー・クーパーが歌うパートを極力少なくしている（？）のはさすが。『スター誕生』という映画の趣旨からも、歌手レディー・ガガの主役起用という面からも、やはり歌の部分はレディー・ガガを立てて、それをメインに据えなければ……。

◆日本では11月に公開された『ボヘミアン・ラプソディ』（18年）が予想外（？）の大ヒットとなり、映画公開7週目で興行収入は65億円を超えたそう。本作の日本での公開は12月21日だが、最新の興収ランキングで6位。朝日新聞（文化・文芸 bunka@asahi.com）編集委員の石飛徳樹氏によると、それはアリーが歌う名曲「シャロウ」が人々の耳に十分に刷り込まれていないためらしい。したがって、同記事の結論としては「シャロウ」の曲が「人々の耳に刷り込まれた時、きっと大爆発が起こる。」と書かれているが、さて……。

2019（平成31）年1月10日記